

栄誉ある賞を受賞

日本民俗学は柳田國男、折口信夫、南方熊楠ら三人の学者によって確立されたといわれています。特に民俗学の両巨頭である柳田氏と南方氏の両氏には、その偉業にちなんだ優れた学者に贈られる賞があります。

櫻井先生はこの両賞を受賞された初の学者であり、日本民俗学大家の名に相応しい最高の栄誉を修められました。

民俗学会では、民衆のとらえ方に関してこの両巨頭の間で亀裂があり、その修復が大きな課題となっていました。櫻井先生は、柳田國男氏に師事した最後の弟子と言われていますが、南方熊楠氏の学説にも関心を向け、日本民俗学の諸分野にわたって幅広い研究を重ね、民俗宗教学の第一人者として世界的な視野で学会に貢献してこられました。このような先生だからこそ、両賞の受賞がこの亀裂の修復のきっかけになってほしいと常々願っていました。

柳田國男賞

日本民俗学に関する公刊された著作論文を対象に、優秀なる業績に対し毎年一回、柳田賞委員会（事務局は成城大学民俗学研究所）が授与。40年の歴史を持つ賞である。

櫻井先生は、「講集団成立過程の研究」により、昭和37年（1962）、第1回柳田國男賞を受賞、以後、「沖縄のシャマニズム」「日本のシャマニズム上・下巻」「日本民俗宗教論」「結集の原点」など多数の著書を発表し、民俗宗教分野においての卓抜した論の展開で、学会に大きな刺激を与え続けました。

柳田國男（やなぎた・くにお）1875～1962

20世紀前半に日本民俗学を創始した学者。東京帝国大学卒業後農商務省に入省し農政に携わる一方、農村の貧困からの解放の可能性を探る実証的な科学として「常民」の姿を描く歴史の研究を独学で進めた。それは、文字を持たない常民の伝承、慣習、言語、民謡、信仰などをふんだんに用いて歴史を描いたところに特徴があった。

民俗学の誕生を告知したといわれる「遠野物語」や、初の世界史といわれる「明治大正史世相篇」などの代表作がある。また、民俗学研究所の設立、日本民俗学会の結成など、民俗学の体系化と組織化を進め、後継者の育成に努め、近代史研究の領域だけでなく広い範囲で大きな影響を残した。

南方熊楠賞

和歌山県田辺市と南方熊楠保存顕彰会が、南方氏没後50年を記念し「南方熊楠賞」を制定。国内外問わず南方氏の研究対象であった民俗学的分野、博物学的分野の研究に顕著な業績のあった研究者に授与。平成2年から始まっており、毎年、人文部門、自然科学部門から交互に選考され、第12回（平成14年）、人文部門で櫻井徳太郎先生が受賞されている。

南方氏のグローバルな視点を受けた櫻井先生の研究は、日本はもとより東アジアへも向けられ、世界的な視野でなされているところに大きな評価があります。

南方熊楠（みなかた・くまぐす）1867～1941

南方熊楠氏は慶応3年（1867）4月15日和歌山県に生まれた。幼児より天才の名をほしいままにし、東京大学予備門（現東京大学）に入学する。しかし2年後に退学し渡航、米国各地、西インド諸島を彷徨しながら菌類・地衣類を採集した。後に英国に渡り大英博物館に迎え入れられ、「ネイチャー」「ノーツ・アンド・クィアリーズ」に多くの論考を発表、その学識の深さは古今東西にわたり碩学の名をほしいままにした。

明治33年（1900）帰国、明治37年（1904）より田辺に居を定め、粘菌・菌類の研究に没頭、数千点に及ぶ彩色図を完成するとともに、自宅の柿の木から新種の粘菌を発見、ミナカタの名を冠せられた。

民俗学関係については、日本民俗学の父といわれた柳田國男氏をしてその学殖の豊かさに驚き、種々の点につき質問を受け、回答したものが往復書簡集として発行されている。

昭和4年（1929）昭和天皇を神島に迎え進講、昭和16年（1941）永眠された。